



パピルス

48編はコラの子の賛歌で、力ある王の都をシオン、またシオンの山と呼び、神を賛美しています。イスラエル人は、高い、静かな山で主にお目にかかれるとされています。古代にはヘルモン山から南にかけてのカナン地方全体を指してシオンと呼びましたが、時代が下ると、**ダビデはシオンの要害を陥れた。これがダビデの町である(サム下 5:7)**とあるように、ダビデがカナン人から奪い取ったヒンノムの谷、キドロンの谷を見下す急斜面にある場所をダビデの町とし、都エルサレムとイスラエルの民をシオンと呼ぶようになりました。現在、城壁の南西側のすぐ外の標高765mの場所をシオンの丘と呼んでいます。

48編は、わたしたちの神の都にある聖なる山は **高く美しく、全地の喜び。北の果ての山、それはシオンの山、力ある王の都(48:2)** と、神の都にある山は「シオンの山」であり、都エルサレムの山と見なしています。都の城郭、砦の塔に、神は御自らを示されると賛美しています。城郭、砦の塔は民を守る盾となります。その高く、美しく、力ある様子に、**敵の王たちは時を定め、共に進んで来た。彼らは見て、ひるみ、恐怖に陥って逃げ去った(47:5)** と、神が民を守って下さると、**聞いていたことをそのまま、わたしたちは見た(48:9)** と、先祖から聞いていた通りの結果をこの目を見た、と喜びます。神殿に参り、**神よ、神殿にあつてわたしたちは／あなたの慈しみを思い描く(48:10)** と、神の慈愛を賛美します。**神よ、賛美は御名と共に地の果てに及ぶ。右の御手には正しさが溢れている。あなたの裁きのゆえに／シオンの山は喜び祝い／ユダのおとめらは喜び躍る。シオンの周りをひと巡りして見よ。塔の数をかぞえ 城壁に心に向け、城郭に分け入って見よ。後の代に語り伝えよ この神は世々限りなくわたしたちの神／死を越えて、わたしたちを導いて行かれる、と(48:11)** と、都の偉容を褒め称えています。イスラエルはこの神を信じ、導かれて、死線を越えてきたのです。中世の壮大なカテドラルの建造物を見ると、48編を具現化したのではないかと思えてなりません。関連讚美歌はありませんが、「讚美歌 1」130(ヘンデル作曲)を、「よるこべや、たたえよや、シオンの娘、主の民よ」という歌詞を覚えて、賛美したいです。参照 https://www.youtube.com/watch?v=YQ_RimJ7x0k

49編はコラの子の詩ですが、**人間は栄華のうちにとどまることはできない。屠られる獣に等しい(49:13)**と、人間は焼き尽くす捧げ物のように消え去る存在であると二度も繰り返して歌っていることに驚きます。レビ人は神殿で燔祭の仕事も担っていたため、獣の死は日常的であったのでしょう。それゆえに死を常に身近に感じていたでしょう。詩人は一人の賢人、老成した人として、**諸国の民よ、これを聞け／この世に住む者は皆、耳を傾けよ／人の子らはすべて／豊かな人も貧しい人も。／わたしの口は知恵を語り／わたしの心は英知を思う。／ わたしは格言に耳を傾け／堅琴を奏でて謎を解く(49:2)** と、死から見えてくる生の神秘を述懐しているのではないかと思います。

富裕な人、地所を所有している人、名誉を得た人、知恵ある人、そのような人々はなんと誇らしく、華やかで、素晴らしいと誰でも考えてしまいます。しかし、そのようなタラントを用いたとしても、**神に対して、人は兄弟をも贖いえない。神に身代金を払うことはできない。魂を贖う値は高く／とこしえに、払い終えることはない(49:8)** と、人の魂の掛け替えのなさを訴えます。人が **自分の力に頼る者…自分の口の言葉に満足する者(49:14)** であるならば、**死ぬときは、何ひとつ携えて行くことができず／名誉が彼の後を追って墓に下るわけでもない(49:18)** と、死んで、腐敗し、消え去るだけだと言います。真に正しい人は、自分ではなく、神の力に頼り、神の言葉に満足する人である、と言います。その人を神は陰府の手から取り上げて下さると歌っています。関連する讚美歌はありませんが、20世紀のオランダの讚美歌である453「何一つ持たないで」を歌いたいです。参照 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2012-05-15>